

神奈川新聞

2009(平成 21)年 6月 8日付 17面掲載

東京都市大

学生が独自に開発

就職支援システムが好評

東京都市大環境情報学部(横浜市都筑区)の学生が、自分たちも使う学内の就職活動支援システムを独自に開発した。厳しい経済状況下で内定を取ろうと奔走する学生と、学生をサポートする大学職員ら双方の負担軽減につながる「道具」として、好評を得ている。

(宮島 真希子)

この仕組みは4月10日に稼働を始めた「進路/内定状況登録・閲覧システム」。学生による内定届登録、教職員で共有可能な内定状況データベース、報告漏れを防ぐ「報告督促メール」など複合的な機能が搭載されている。2010年春の卒業対象者(大学院生含む)469人が登録している。

同大で学生の就職支援を担当するのは「学生サービスセンター」の職員・アルバイト6人のスタッフだ。適性に応じた就職先とのマッチングを図るため、3年時の4月から学生の表現力・分析力を高める各種講座を100回以上開催する多忙な課だという。しかし、この新システム導入前は紙ベースでの情報共有が主だったため、支援活動の戦略や方針の要となる「基礎データ」収集・作成に手間取り、対面相談など本来の学生サービスに時間が割きにくいのが悩みだった。

を使い、今年2月に完成させた。岸田さんは「シンプルで管理しやすい設計を心がけました」と話す。苦労したのは、主たる使い手となるサービスセンター職員とのやりとり。専門的なことを知らない人たちの希望をいねいに聞き取り、プログラムに反映させて「満足してもらおう」ということの難しさを経験したという。

学生サービスセンターの渡邊真理子さんは、「事務作業が軽減され、学生とのコミュニケーションに力を注ぐことができるようになった。より手厚いサポートが必要な不況時なので、助かっています」と、新たなシステムの導入を歓迎。

学生の開発を指導した大谷さんは「依頼者のいるシステム開発を実験することで、社会人技術者になってからも欠かせないコミュニケーション能力、要望を理解し快く受け入れる度量を身につけられる。学生にとって成長できる貴重な機会でした」と話している。



システム稼働時の4月、同級生を前に操作方法などを説明した大谷研究室の開発メンバー
|| 横浜市都筑区の東京都市大学

記者 宮島真希子